

## 十八世紀ドイツの子どもの本(6)

### 児童書の成立と受容を理解するために

佐藤 茂樹

#### 古い書物との接点を求めて

——これまで五回にわたって、十八世紀ドイツの子どもの本を駆け足で見てきました。十八世紀の書物は、そのまま翻訳紹介しただけではうまく伝わらないことがあります。その原因は、身の回りの品や言葉遣いが変わってしまったという個別的

なものにとどまらず、ある時代の発想に根本的な制約を与える時代の枠組み全体の変化によるところが大きいと思われれます。そこで最終回のこの稿では、十八世紀の児童書を踏み込んで読めるための前提を少し論じてみたいと思います。

——ダイジェストで人から紹介されたときには面白そうだった昔の本が、オリジナルを自分で読み

始めたらどうしても先を読み進めなかったということとはよくあることですね。へ現在の自分〜という制約から、一度自由になって読みたいとは思いますが……。

——時代も文化的背景も異なる書物を公正に読む場合には、テキストとテキスト外の諸条件との相互関係を理解することが特に重要だと思えます。

例えば、第二回で紹介したヨーアヒム・ハインリヒ・カンペの『ロビンソン・ジュニア』はドイツ児童書の歴史の中でも比類のない成功を収めた書物のひとつですが、その成功は当時のドイツの現実を無視しては考えられません。著者カンペはこの本の受容者が共有する土台には、それまでにはなかった新しい意識があります。それは、当時のドイツの社会構造の変化に伴って醸成されたものなのです。そしてそのふたつが相まって、児童のために読み物を求めるといふ以前には考えられ

なかった受容層を開拓し、そのための市場を生み出しました。この点にまず注目しておきましょう。

——では、その社会構造の変化と言いますと。

——まず何よりも小家族を核とした教養市民層の形成を挙げなければなりません。

### 小家族の成立と新しい意識の形成

——ここでいう〈小家族〉とは、もちろん人数に重きがあるのではなくて、構成が両親と子どもを軸にするという意味です。それがどれほど意識の変化にとって決定的なことであるかを知るためにも、先に産業社会以前に支配的であった大家族制を見ておきましょう。

産業社会以前の家内制手工業に従事する大家族制は、寝食を共にする徒弟、奉公人等を含んだ生産共同体であることにその本質があります。ここ

では住と職が同一の場で當まれ、家族の一員は同時にその生業を分担する一員でもあります。大人

と子どもの間は、年齢に応じたその都度の能力の差こそあれ、連続しています。これは、幼年時代をどう位置づけるかに決定的な影響を及ぼすと考えられます。つまり、この家族形態の下では、子どもはあくまで近い将来に労働上同等の役割を担うべく大人の予備軍にすぎません。

——ということとは、子どもは早く大人になることだけを求められている、という意味ですか。

——ここからは、幼年期を単なる大人への途上から切り離れた固有の時期と捉える考えが生じにくいということなのです。

——お話を先取りすれば、幼年期を固有の意味をもった時期と捉える意識は革命的なもので、市民社会の小家族制の下ではじめて芽生えたということだと思いますが、それでは、この小家族という

形態のどこにその要因は求められるのでしょうか。

——その要因は、何よりも職場と住居の分離に求められます。これによって家庭は外部から切り離された完全に私的な領域となったのです。父親が一手に家計を担うものとなり、外部の職場に出勤し、収入をもたらします。母親は留守を守ってアンチームな生活空間としての家庭をアレンジします。こうして家庭の内に役割の分化・分担が生じます。今や生活のための就労から解放された母親には、それによって生じた時間的ゆとりに伴って、子どもに目を配るといった新たな役割が生じたのです。子どももここでは就労から解放されていますから、すぐに実際上の役割を引き受けることは求められなくなります。子どもは、将来自分たちの階級の理念を継承すべく必要な教育を受けながら自己形成を行うことが求められる存在となり

ます。ここから〈幼年期〉を独自の時期と捉え、独自の意義を付与する考えが生まれるのです。これは、特にルソーの影響を受けた教育論に言葉を与えられたことは事実ですが、現実的にはこのような家族構造の変化とそれに伴う新しい意識の形成が与っているという点が重要なのです。

——そうして教育が論じられる環境が整ったわけですね。

——その通りです。そして〈子ども部屋〉という言葉がこの時代には独特の意味を帯びたものとなります。それは〈階級固有の良き教育〉と同義であり、単に子どもに与えられた独立の空間という以上に、市民階級の子どもの社会化の場所という役割をも合わせもつものとなったのです。この〈子ども部屋〉に対応するマイナスの符号をもつた言葉が〈路上の子ども〉で、この言い方のうちに、市民階級にとっていかに子どもを外部から保

護・育成する場所と考えられていたかが窺えます。そして、教育が家庭教師を雇うことのできる裕福な層からさらに市民階級内に一般化するに伴って、この〈子ども部屋〉のために印刷した教材への需要が高まります。それが児童書の市場の形成へとつながるのです。

——職住の分離によるアンチームな私的空間としての家庭の成立、それに伴った〈幼年期〉を固有の意味をもった時期と捉える考え、その時期にふさわしい教育の与えられる場としての〈子ども部屋〉の成立、そしてそのための教材の需要。十八世紀に児童のための書物が普及するコンテクストはこれでひとまず理解できました。以上概略をうかがった上で改めてお聞きしますが、ドイツの児童書を考える上で、では主としてどのような理由からこれまで述べられたことが共通認識とならねばならないのでしょうか。

——それは、ドイツの啓蒙時代の児童書が、いや単にこの時代に限定されないのかも知れませんが、直接に児童ではなく両親や教育者に向けられ、彼らのフィルターを通して子どもに語られたからなのです。つまり、個としての人間の表出ではなく、まずは公共の教育の書として構想されているということなのです。そしてこの教育の目指すところは、へ市民にして人間」という啓蒙思想の理想像の形成に寄与することであり、その意味でカンペのロビンソン物語はひとつの典型をなしているのです。質問に沿って言い換えれば、次のように要約できると思います。児童書の普及には、へ幼年期」という時期を固有の意義をもったものとして認識する新たな意識の形成が不可分である。そしてそれはひとつの階級のディスクールなのですから、その意味でそれを形成した社会構造の変化が独立した個の表現である大人の文学の

場合よりもより顕在化した形でこの時期の児童書には読み取れる。だからこそ、テキスト外の諸条件との相互関係こそ共通認識とならなければならぬ、ということになりましょう。

### 教育の世紀と児童書

——社会構造の変化に伴って生じた新しい意識にはルソーの影響を受けた教育論が伴走しているということに先ほど触れました。そこで次に、この時代にはどのような理由で市民階級と教育が密接に結びついてきたか、さらにその教育がなぜ虚構の物語と結びついたかをお聞きしたいと思います。

——市民階級と教育の結びつきからお話ししますと、それはこの階級の解放史と関係しています。十八世紀ドイツの市民階級は形成途上の階級です。これから自己のアイデンティティを確立し

ていかなければなりません。世襲的に継承する具体的なものをもたないこの階級は、その抛り所を貴族のように血縁・出生に求めたり、農民のように土地に求めたり、ギルドの職人のように独占した職能に求めることもできません。しかも政治的に力を発揮する可能性を制限されていたために、他の階級に対してその理念的な独自性を主張して差別化を図ろうとする自意識がそれだけ強いものとなったのです。

——宮廷と貴族が支配的な社会の中で、市民階級は権力に代わる自己評価という目標を追求したわけですね。具体的には、何が自己評価の軸となりますか。

——徳とモラルです。これらはもちろん生得のものではありませんから、市民が市民であり同時にそれが普遍的な人間の在り方につながるものなら、努力して自己形成し、教育によって次代に継

承しなければならぬものだったのです。ある人は、「思考および行動様式としての〈市民性〉」という言葉には、つねに努力的な響きが伴う」と言っています。そしてそれは、「業績に基づく地位が、地位的優位を出生とともに与えられている支配的階層において認知されるための強いられた努力の結果である。知識、能力、道徳的統合性、それどころかその優越性といったものは、社会的ハンデを完全に止揚するのではないにしても、やわらげるはずのものであった」とも述べています。教養は、ここで述べられているように、政治的な無力等に対する代償としての役割を果たしていたわけです。

では、下の階級に対してはどうだったかという点、まず何よりも非肉体的労働に従事しているという点が強調されます。市民階級に教えられる当時の職業のリストを見ればわかるように、それら

に従事するためには技能の養成とは異なつた総合的な判断を可能とする独自の知的養成の過程を必要とします。その意味で、それらの職業に従事していることは、実的な權威に結びつくものでなかつたにせよ、何らかの人格的〈希望〉を伴うものでありました。逆に言えば、非有産階級にとつて、教養は市民階級の一員であることを認知される方途でもあつたのです。

市民階級は、他の階級の労働を収奪せず、また他の階級の労働を評価できる自分たちの徳目こそ普遍人間的な徳目であるという確信に支えられていました。〈市民〉であることは、同時に言葉の本来の意味で〈人間〉であるということを表すものでなければなりません。教育は、その〈市民にして人間〉という自己形成を実現すると考えられたからこそ、この階級の努力の中心の座を占めたのです。

——なぜ教育と例えば『ロビンソン』のような虚構の物語が結びついたのでしょうか。

——先ほどの家族形態の違いに話は戻りますが、大家族制の下では子どもは大人の労働と職業に直接的な関係をもっています。家族の生業を見て、ともにそれを分担する中で将来の職業的な役割に導き入れられ、それに必要な技能を自己同一的な学習を通して身につけたわけです。ここに大家族制の子どもの大人の社会に対する関係の本質があります。これに対して職任の分離に本質がある市民階級の小家族制の下では、子どもの経験領域は労働世界との直接的な接触を免れている点にこそ利点を見出しているわけですから、このような形で社会化を達成する可能性ははじめから排除されているのです。そこで、家庭の範囲を越える諸事情をふたたび〈媒介的〉に家庭に取り戻して子どもに近づける手段が必要になります。裕福な家

庭は特権的な教育手段によってそれを達成できたわけですが、ただしここには広範囲な普及という問題が残ります。

——そこで新しいメディアとしての書物がそれに取って代わるわけですね。

——少人数による理想的な教育には、需要と供給の両面で限りがあります。そうした実践から出発した博愛主義者たちも、自分たちの理想とする教育をより多くの子どもたちに近づけなければならぬという課題に直面します。現実にはロビンソン物語の〈父〉のような有能な教育者を雇うには、経済的に裕福でなければなりません。しかし、理想的な教育の実際が物語の形で〈公開〉され、読書を通じてより多くの子どもがいれば仮想体験するような形でそれに与れるとしたら、少人数教育のもつ利点が伝達されると同時に致命的な限界が一部なりとも越えられることになります。こうし

て、より広範囲な経験の仲介の実現が教育と書物を結びつけたわけですが、そこで、ではなぜ教育がとりわけ虚構的物語と結びついたかという先ほどの質問が残ります。それに一言でお答えすれば、虚構のもつ情緒的な一体化と模倣衝動を惹き起こすという要素に特に博愛主義的教育者たちが注目したということなのです。ここに虚構的物語が子どもにとつてこれほどの規模で以前にはもつていなかったひとつの機能を獲得するのです。すなわち、子どもにはもはや直接的に到達できなくなった経験を仲介する重要なメディアウムになったのです。

——市場の形成がこれに続くわけですね。

——特権的な教育を享受できる家庭で、それに携わっていた家庭教師には時間的余裕があり、教材は自作でした。それが、教育の印刷物による〈公開〉ということになりますと、需要を生み、市場



を形成することになります。事実、十八世紀の六〇年代後半には突然の児童向け出版の増大を見ます。そして八〇年代にはそれが頂点に達します。

この度の連載で取り上げた書物の出版とちよūdō重なっていますね。教育の普及に伴って需要が拡大し、読書の形態もこの頃から一書反復精読から多読へと変化していくことも付け加えておきましょう。

### 連載を終えるに当たって

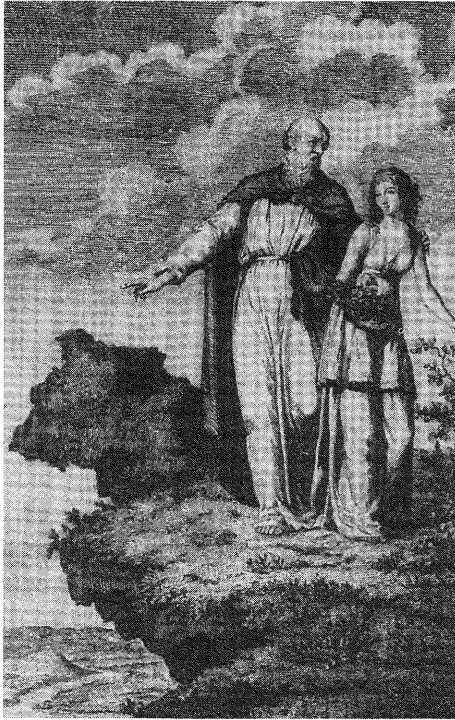
——今回ご紹介した書物は、啓蒙思想の色合いが濃いものとなりました。それはこの世紀の特色でもあるのですが、同時にまたそれ以外のものは今日まで残っていないという事実をも意味しています。子どもの本は、成長に伴って読み捨てられるものなのでしょう。啓蒙色の濃いものは、いわば社会公認のプログラムであったという事情が幸い

して親や教育関係者などの手によって豪華に製本され、古書市場を通じて一部が今日まで伝えられています。それでも、公共機関等が本格的に所蔵に乗り出したのは、それほど昔のことではありません。そこに行けば十八世紀の代表的な児童書の現物を一覽できるような機関の実現も夢のままでしょう。そんなわけで、世紀の全体像を把握し、紹介するのはわたしの力を超えていることをお断りしておかなければなりません。

——最後に、今回の紹介から漏れたうちから代表的なものを挙げるとすれば、どんなタイトルがあるでしょう。

——まず第一に、十八世紀児童書の代名詞ともいえるクリステイアン・フェリクス・ヴァイセの児童誌『児童の友』を挙げなければなりません。一七七六年から一七八二年にかけて二十四部三百六十二篇が刊行されました。「親愛なる読者のみ

さんの中には、きっとヴァイセの『児童の友』を読んだことのある人もいるでしょう。自分自身では読まなくとも、ご両親は読んだことがあるかも知れません。二十年から三十年前には、ドイツではこの本ほど人気があつて、よく売れて、読まれた本はなかつたからです。ヨーロッパの他の国々でも知られ、評判を呼んでいました。子ども時代



のわたしにも、彼の『児童の友』と『児童の歌謡集』は為になつて楽しい幾時間かを与えてくれたもので、心から感謝しています」とは、後年自分でも『新児童の友』を編んだ人の言葉です。この言葉に見るように、数々の後継書の雛形になりました。他には、選択に迷うのですが、年少児童向けのいわゆるABC入門書、女子児童向けの雑

誌・単行本など特徴的な分野がまだまだ残っています。ひとつ選ばなければならぬとしたら、フリードリヒ・ユステイアン・ベルトウフの彩色のきれいな『子どもの図鑑』（全十二巻）かも知れません。

（関東学院大学）

☆この連載は今回で終わります。